

コリントゲーム作り 刈谷市立衣浦幼稚園（愛知県刈谷市）

【5歳児】

< 幼児の姿と保育者の願い >

コリントゲームを楽しむ姿があったので、保育室隣のプレイルームには、友達の刺激が取り入れられるようにコリントゲームを並べて置いた。その一角に作るコーナーを設け、机の上には画用紙やのりなどの材料や用具、ワゴンにはカップ類や菓子箱を入れて置いた。



Y児、H児、S児の3人は、自分が工夫した所を話したり、転がす玉の行方を、顔をのぞかせて見たりしていた。また、クラスの友達の飾られている作品を順番に見て「スタートに旗が立っている」「この橋いいね」などと工夫してある部分を見付けては、互いに伝え合っていた。そして、Y児が「もっと難しいのを作りたい」と言ったことからH児、S児も「もっと難しくしよう」と言って動き出した。

保育者は、ゆったりした時間の流れの中で、玉を何度も転がしたり、友達の作品を見て刺激を受けたことを取り入れたりしながら、考えたり工夫したりして作ったり、遊んだりすることを楽しませたいと思った。

< 事例1 > 「いつもここで止まっちゃうんだよね」

6月中旬

Y児：玉を何回か転がしてみた後「いつも、ここでボールが止まっちゃうんだよね」とつぶやく。

保育者：「先生にもやらせて。ほんとだ。どうして、うまく転がっていかないのかな。どこがいけないんだろうね」と一緒に考える。

S児：手を止め、立ち上がってじっと玉の動きを見ていた。

Y児：「ここが狭いんだよね」

S児：「ここをちょっと切ったらいいんじゃない？」

保育者：「そうか」

Y児：「切ってみよう」と邪魔している部分の紙を慎重に少し切り落とし、早速玉を転がしてみた。

Y児：「まだだめか。もうちょっと切ってみよう」「あっ、転がった」

保育者：「やった。うまくいったね。Sちゃん、いい考えだったね」と喜ぶと、2人で顔を見合わせて笑った。



< 実践2 > 「そっか」< S児 >

6月下旬（1週間後）

S児は、箱をつなげ、牛乳パックの紙で橋を付けたり、トイレットペーパーの芯を立てたりして、友達の作品を見て「いいな」と思う部分を取り入れて作っていた。そして「このトイレットペーパーに当たると、倒れてこの中に玉が入って出てくるようになってるんだよ」と言った。実際にはうまく芯の中に入らないため、手で玉を通らせる。何度も玉を転がし、トイレットペーパーの芯に当てる。芯には当たるものの跳ね返り、芯の中を通らない。

そこで、T児のゲームをじっと見ていた。T児の芯には、下の部分に玉が入る枠が切ってあるので、T児に「やらせて」と言い、実際に手にしてなぜ倒れるのか確かめていた。何度も何度も玉を転がして確かめた後、「そっか」と、自席に戻った。そして、芯の底の接着部分として切り開いたのりしろの部分の切り落としをした。そして、再度接着し、玉を転がした。安定はしてきたが、玉が曲面に当たり跳ね返るため、芯は倒れるが、思うように芯の中に玉が入らない。何度か転がした後、またT児のゲームを見に行く。芯を手で動かし、思いついたように、接着していた芯をはがし、はさみで下の部分に玉が入る分の穴を切り抜いた。そして、再度芯の一部分を接着し、玉の動きを確かめる。玉が穴を通して芯の中に入り、そのはずみで芯が倒れて玉が転がって出てきた。保育者の顔を見て、にこっと笑い、保育者も「やったね」と、微笑み返した。

翌日、S児は昨日作った芯の部分に玉を繰り返し転がしていた。そして、保育者に「出てきた玉が、橋の上に落ちるようにしたいな。そこに、落とし穴を開けることにする」と言って、取り組んでいた。

<考察>

目的をもって取り組むことで、周りの環境を生きたものに

幼児たちは、初めのうちはスタートからゴールまで転がすことがただただ楽しくて、何度も転がしていた。

Y児は転がして遊ぶことを繰り返すうちに、スムーズに転がらないことに気付き、転がるようにしたいという思いが湧いてきた。また、Y児もS児も継続して取り組む中で「もっとこうしたい」という思いが生まれてきた。

S児の気付きを支えてきたものは「ああしたい」という思いを持ち続けたことと、T児の発想との出会いであろう。また、Y児やH児ら周りの友達がそれぞれに工夫して遊んでいたことも影響しているだろう。それぞれに思いや目的は異なるが、その中から自分にとって必要なアイデアを探したり、取り入れたりする環境“遊ぶ” “工夫されている作品を見る” “工夫する友達がいる”があったからであろう。周囲で遊んでいる友達の思いや工夫が、イメージの広がりとなり試行錯誤の原動力となる。

一方で、幼児が「ああしたい」と目的に向かって取り組む中で、失敗もある。しかし、失敗を次の経験へと生かしていくことで、うまくいった時の成功感も大きい。こうした中で、失敗を恐れさせないような保育者の受け止めや、試行錯誤できるようなゆったりとした時間や日の流れが大切になってくると思う。その中で、幼児の発見や気付きを感じられる、一人ひとりの試しを面白いと感じる保育者の存在が、幼児が考えたり試したり工夫したりする心の大きな支えになり、幼児にとって大きな環境であると考えられる。

<この事例から読み取れる科学する心と充実感>

「どうしてかな？」の疑問と「こうすれば、できる。できた！」の感動

友達の力を借りて、思いを実現する充実感

Y児は、繰り返し玉を転がして遊ぶうちに「いつも、ここで玉が止まってしまう。どうしてなんだろう？」と、疑問をもった。初めは、自分では答えが見出せなかったが、友達にアドバイスを受けることで、切る 転がして 試す 調整する 試す うまくいった、という思いを実現する喜びを味わうことができた。それと同時に「どうしてかな？」と科学的疑問をもつとともに、友達の力を借りながら、その疑問に対して「こうすれば、できる」という自分なりの解答を見付けていくこともできた。こうした姿は、科学的推察の芽生えであると考えられる。

「どこが違うのかな？」の追及と「そうだ！ここだ！」の発見・成功の喜び

友達の工夫を取り入れて、自分の力で考え、試し、作り上げていく充実感

S児は、友達から刺激を受け「あんなふうに、うまく倒れるようにしたいな」という思いを抱いた。そして「どうしてうまくいかないんだろう？」と、

何度も転がして原因を考える。

T児のゲームをやらせてもらうことで、よく見て、自分との違いを考える・見付ける。

気付いたことを改善する。

改善したことがどうであるか確かめる。

問題を見付ける。

新たな改善策を考える・改善する。

試すことで、友達の工夫に気付き取り入れながら、自分の力で考え、試し、作り上げていく充実感を味わう。

ことができた。「あんなふうに作りたい」という主体的な強い思いが“なぜなんだろう？”と深く問題を見つめ、考える眼” “どこが違うのだろう”と違いを見付けようとする眼” “違いに気付きやってみよう”と挑戦する心”をかきたて、その過程の中で様々な心が育っていくことがわかった。



みどころ

学年やクラスの子ども全体の実態やその場の状況を把握して保育する中で、一人ひとりに応じてかわることの大切さが、この事例から分かります。思いを実現しようとする子どもの思いやつまずきは、友達の存在によって考えや工夫が引き出される意欲的な取り組みにつながっています。具体的な目的や困難なこと、考えや工夫は一人ひとり違いますが、それを理解することは「科学する心」の育ちを捉えることに結びつきます。